|  |
| --- |
| 取組みテーマ  （１０）「地域に開かれた施設運営」地域での理解者を増やすための取組み  ～オープン施設、ボランティア講座、苦情相談日の開催、実習生受け入れ～ |
|  |
| １　施設種別 |
| 障がい者支援施設　（旧　知的障がい者入所更生施設） |
| ２　ねらい |
| 利用者が地域に出た時に生活しやすいよう多くの方々に施設に訪問してもらい、どのような生活を送っているのか知ってもらうことで障がい者の方を理解してもらう取組みを行う。  また、外部の方が施設に入ることにより、施設内では当たり前のことでも地域における社会資源として地域の方々に理解してもらえるよう改善すべき点があれば見直す機会とし、支援の見直しや支援の向上にもつなげる。 |
| ３　取組み内容・経過 |
| 地域に開かれた施設運営をめざし、次の４つの取組みを実施する。  １．オープン施設～大学の「オープンキャンパス」からヒントを得て～  ・地域のみなさんに、入所施設がどんなことをしているのかを知ってもらうため、「オープン施設」を開催し、いろんな人が施設に来てもらう仕組みづくりを行う。  ・通りすがりの地域の人に挨拶をした際、「ここ（当施設）は、何をしているところなの？声は、するし、どんな人がいるの？」と聞かれたことがあり、きちんと説明する責任を感じた。  ・また、外部の人へ自分たちが行っている支援を説明することを通じて支援の見直しにもつながるのではないかと考え、外部の方が気軽に施設を訪れる機会として、H18年度より「オープン施設」を実施している。  ・年４回（春、6月、夏、冬）開催し、時間は、PM１：３０からPM３：３０まで。  ・内容は、利用者が日中活動として行っている陶芸作業、内職作業、ウォ―キング、創作活動などの見学や体験をしていただく。（訪問しやすいように、来ていただいた人に、ゆっくりとした空間を提供し話がしやすい雰囲気を作っている。）  チラシ配布の際は、世間話をしよう！～コミュニケーション能力の向上～  ・オープン施設の開催案内については、小中高、大学、特別支援学校、近隣の商店、交番、また、市役所や相談支援事業所などへちらしを配布する。近隣へは、利用者とともにちらしを配りに行っている。系列のケアホームのある府営住宅では回覧板で案内してもらい、地域の掲示版にも貼ってもらっている。施設の柵に掲示したちらしを見て、通りすがりの人も気軽に来てくれることがあり、広がっている。  【現状】  ・当初、ちらしを配りに行ってもなかなか理解してもらえなかったが、今ではすっかりなじみになっている。  ・来所者は、はじめ２～３人だったが、今では平均１２～１３人、多い時で２０人くらい来られる。  繰り返し来られる人も多い。  ・夏休み、冬休みは、特別支援学校の生徒さんとその家族が多く、生徒さんは施設利用者と活動し、家族はサロンで話したりしている。生徒さん、家族にとって施設を知る機会となる。  ・オープン施設に来ていただいた方が、知り合いを誘ってきてくれることがあり、少しずつ人の輪が広がっている。また、オープン施設に来たことをきっかけに施設見学の希望や、施設へ入所するにはどうしたら良いかなどの相談も増え、気軽に考えて頂けるようになっている。  当施設は、  ・職員は施設見学の回数が多くなると、今実施している支援の説明がこれでいいのか？などと職員間で話し合うきっかけになっており、対応の仕方の勉強にもなっている。  C:\Users\KodamaR\AppData\Local\Microsoft\Windows\Temporary Internet Files\Content.IE5\ZUUHU4T3\MC900437651[1].wmf  当施設  **～同法人のケアホームの近所の方から～**  ケアホームの入居者の足音や、大声を出す人について「オープン施設」に相談に来られたこともある。オープン施設が誰でも入れる場であるため、意見を言いやすい場になっている。  施設としては、地域の方からの意見を聞き良い関係を築けるきっかけになったと感じている。施設内の生活で、当たり前になっていた足音や声などについて、地域の方から意見をいただき、地域の中で愛される施設になるのに配慮すべき点について改めて気づいた。  ２　ボランティア講座  **当施設**  ボランティア講座を開き、施設でのボランティア体験を通して、障がい者の生活を理解してもらう。学生さんを中心に展開することで将来の障がい者の方の理解者が増え、少しでも地域で住みやすくなるよう考えた。  また、当施設のボランティアとして来てもらうことも大事だが、ボランティアさん自身が住んでいる地域でも活動してもらえるように「どこでもいいから活動してみて、相談しに来てくれてもいいよ！」と伝えている　。    「なぜボランティアが必要？」  ～職員間での趣旨の周知～  ・はじめに職員間で、施設にとってボランティアが必要か？なぜ必要なのか？ボランティアに職員の代わりをさせようとはしていないか？便利使いしていないか？誰のためのボランティアだろうか？との議論を積み上げた。  小・中・高・大学へちらしを配布する。  近辺へは、利用者とともに配付に出向く。  C:\Users\KodamaR\AppData\Local\Microsoft\Windows\Temporary Internet Files\Content.IE5\QC5KN6DB\MC900441916[1].wmf・施設内では、利用者は、職員と接するのみで毎日限　　られた人に接するだけであるが、ボランティアさんに来てもらうことで接する人が増え、ゆったりと好きなボランティアさんと関わることができた際には、利用者の笑顔が多くみられる。  ・施設から外出した時に、障がい者に初めて会う子どもに泣かれたり、避けられたりいろいろなトラブルがある。障がい者のことを知らないため、やっぱりマイナスイメージが勝ってしまうのだと考える。そんなマイナスのイメージをなくすために障がい者の方を知ってほしい、地域に理解者を増やしていきたいという思いで実施している。  ・職員からボランティアに何をしてもらったら良いかわからない、ボランティアが来ると緊張するなどの意見が出ることがあるが、ボランティア講座の目的・趣旨については、繰り返し職員間で共有し、職員が変わると改めて周知するようにしている。   |  |  | | --- | --- | | 内容 | アイスブレイク（緊張をほぐすプログラム）⇒担当者から説明⇒参加⇒振り返り  （おやつ作り、散歩、陶芸、カレンダーづくりなど） | | 回数 | 年1回、8月に実施　時間は13：00～16：30 | | 参加者 | 高校生、大学生が多い。中学生へは、授業の一環でボランティア体験の受け入れ。(現在市内の2中学からの受け入れ)。小学校へは、児童はもちろんのこと、教師向けにも案内している。最近では民生委員さんの施設見学をきっかけに民生委員さんへも広がっている。 |   【現状】  ・ボランティア体験から実習へとつながることや、何度もボランティアに来てくれる人もいる。また、後に福祉の道に進んだ人もいる。  ・職員にとっても、ボランティア講座を経験することで自信がつき、いろんな人の受け入れがスムーズになる。説明が良かったか先輩職員に確認するなど取組み方も変わってきた。また、ボランティア担当の名称を、人と人とをつなげる、地域とつながるといったことを意識し「ボランティアコーディネーター」に変更し、今後ボランティアの受け入れマニュアルを作成する予定。  ・利用者は、ボランティアさんが来てくれることで話をゆっくり聞いてもらったり、マンツーマンで対応してもらいとても喜んでいる。外部からの訪問が嫌な人や苦手な人は、はじめは自分の部屋で過ごしてもらったりして訪問者と接することのないようにしていたが、施設見学の回数を重ねるにつれ訪問者に慣れてきた。施設の入所時には家族にも、ボランティア等外部からの訪問者があることを説明し理解していただいているため、これまで訪問者によるトラブルはない。  ・施設はどうしても閉塞感が虐待につながるので、人が来ることで職員も自分を振り返ることにつながる。    **「桜餅　食べたいねん」**  利用者は、施設にいると○○施設の利用者さんと呼ばれることが多い。○○さんと訪ねてきてくれることがないので、そんな環境が増えれば、個人を尊重した支援にもつながると思う。  以前、ボランティアさんにお誕生日の話をし、「桜餅が食べたいねん」と言っていたようで、実際にお誕生日に桜餅を持ってきてもらいハッピーバースディの歌を歌っていただいた時には、とても喜んでいました。こちらがあったかくなるような忘れたらだめだなーって思うエピソードでした。  [http://msp.c.yimg.jp/yjimage?q=T9rGn0wXyLFPADkHdF0YMSUU1kk1W1YnWYByWFvEC2Hc29YSFC8mZNfosEOToJfuLykakXtm1M8tq9ziD8n0elaXI5TY_rJNioD_PDaXwaB21SAQ5lY2p1ii6FgpipSdJNY-&sig=12ttbgjg8&x=159&y=137](http://ord.yahoo.co.jp/o/image/_ylt=A3JuMFzTGAhTMnAA.UGU3uV7/SIG=12gujvdkk/EXP=1393125971/**http:/photolibrary.jp/mhd8/img168/s-2010081912230760119.jpg)   * 第三者委員は民生委員の方と親の会の方から2名、施設に訪問して頂ける方へ依頼している。 * 特に民生委員の方には、施設の建設時にも地域の自治会への橋渡しや現在もケアホームの立ち上げにご協力いただいており、自治会長が変わるごとに施設と一緒にあいさつも行ってくださっている。民生委員の方が一緒に行ってくださることで地域の方に理解していただきやすい。 * 年２回の相談日だけでなく、普段から行事などを見に来ていただく中で、利用者の顔も覚えて頂き、良い関係が築けている。利用者も第三者委員さんと顔なじみになり、訪問を楽しみにしている。 * 第３者委員さんからは、施設の玄関に施設の情報を掲示してはどうか、また、地域の掃除や祭りに参加したらどうかなどのご意見をいただき、施設が地域の一員として位置付けられてきている。 * 施設としても、地域の情報を得たり、地域の方との橋渡しもしていただき大変心強い協力者になっていただいている。   **３．第三者委員の訪問による苦情相談日の開催**  ○年2回　施設での苦情相談日を開催  ○利用者からの相談の受けつけ、施設で受け付けた相談（利用者・家族・地域）の報告   * 実習プロジェクトにおいて、実習プログラム、説明資料等を作成し、法人内の全事業所で実習生に対応できるようにする。実習生への対応は、実習プロジェクトの担当者が行い、実習生へのアンケートをもとに年1回実習プログラム、説明資料を見直し更新している。 * 社会福祉士資格取得実習、保育実習、行動援護実習、社協の職場体験、介護体験実習などで年間約５０人を受け入れている他、地域の中学２校からの職場体験も受け入れている。 * ケアホームでの生活や支援を理解するため、同法人のケアホームでの一泊の実習も取り入れている。 * 実習前に社会福祉士養成学校等の担当教官と打ちあわせをし、担当教官とも一緒に実習内容について考えていただいている他、実習生に教えるという視点ではなく、ともに考え取組めるような環境を作っている。 * ソーシャルワークの実習では、実習生が最後に模擬の個別支援計画を作成し、担当教官、利用者の担当者等へ説明する。施設担当者からすると新たな視点を発見できたり、実習の中でアセスメントについて振り返りになり、実習生と一緒に学ぶ機会にもなっている。 * 実習生が感じた違和感は、職員にとって当たり前になっていることが多く、もう１度考え直す良い機会になっている。   **４　実習生受け入れプロジェクト**  ○学生に障がい分野に興味を持ってもらうこと及び人材育成のため、積極的に実習生を受け入れる体制をつくる。  　○実習生の受け入れにより、支援を見直す機会とし虐待防止へも生かす。 |
| ４　施設の振りかえり・感想 |
| ・当施設では、入所施設を「終の棲家」としてではなく、「通過施設」としてとらえ地域での生活を視野に入れながら利用者一人ひとりの力を最大限発揮できる場となるよう取り組んでいる。そして、地域福祉の推進のため、施設開設以来、地域に開かれた施設運営を目指しており、利用者が地域に戻った時に生活しやすいよう地域の方々の障がい者の理解を深めるための取組みを実施している。  はじめは、地域へ行事等の案内ちらしを配りに行ってもすぐに快く受け入れていただいたわけではなかったが、地道な取組みを重ねることで、今では気持ちよく受け入れてくださり、地域でお会いしても声をかけてくださることもあり、なじみの方が増えている。  また、取組みにあたっては、どうしても職員の業務が増えたり、外部の人への対応に緊張感を感じることもあるが、外部の方を受け入れることが職員にとって支援の振り返りにもつながったり、閉塞的になりがちな施設支援を利用者本位の支援に考え直す機会につながるという効果もあるということについて議論を重ね、職員全体が趣旨を理解して取り組めるように力を入れてきた。  今後も地域に開かれた施設を目指して、利用者がたくさんの理解者に囲まれ安心して生活できる環境を目指したいと考えている。 |

**説明: C:\Users\KodamaR\AppData\Local\Microsoft\Windows\Temporary Internet Files\Content.IE5\ZUUHU4T3\MC900405972[1].wmf　ポイント**

・入所施設の位置づけを「終の棲家」ではなく「通過施設」として明確にし、地域で安心して生活できるよう理解者を増やす目的で、施設を地域に開く取組みを実践されている。

・外部の人が施設に入ること、支援について説明する機会を持つことで、説明できる支援を行っているか振り返ることにつながる。

・外部からの訪問の受け入れは、利用者のプライバシー、環境への配慮や各種準備など労力も要することではあるが、積極的に取り組むことで施設の中だけで通じる視点での支援ではなく、外部を意識した支援にもつながり、結果的に利用者主体の支援の向上につながる。また、支援内容を説明する機会を通して職員の育成にもつながる。